

泉川 泰博 教授

国際交流論Ⅰ・Ⅱ、Special Lecture、
特殊講義(研究デザイン入門)

国際関係とは、
さまざまな
行為主体の相互作用で
成り立っている。
その根底にある、
真実を読み解こう。

ある国とある国が協力する。
ある国がある国に対し、挑発的な行動に出る。
しかし、そうした表に出る動きの根底には、
多くの場合、別の意図もある。
「事象の本質を探究しないと、正確な洞察はできない」と語る泉川先生は、複雑に入り組んだ国際関係を理解するための指針を与えてくれる。

ビジネスマンから研究者へ。
揺れ動く東アジアの
国際関係に関心を抱く。

関西弁の軽妙な語り口が印象的な泉川先生は、大学卒業後、一度は企業に就職したものの、研究者に「転職」したという経歴を持つ。

「在学中から国際関係に興味はあったのですが、学生生活の中心は体育会活動。勉強はさっぱりで、英会話もおぼつかないほどでした。そして、せっかく抱いていた国際関係への興味を深めることなく就職しました。大阪にあるエネルギー分野の企業

で、原料調達などの業務もあるためグローバルな仕事ができるのではないかと期待していたのですが大ハズレ(笑)。インフラ工事の管轄部署といったバリバリの現場に配属されました」

その後、経営に絡む業務も経験されたが、泉川先生は退職を決意する。周囲の先輩や同僚からは呆れられた、と泉川先生は笑いながら当時を振り返る。

「確かに安定した企業で、給料もいいし転勤は少ない。尊敬している先輩もたくさんいました。けれど、肝心の仕事に満足できなかった。40代、

50代になった時、その企業で仕事をしている自分の姿がイメージできなかったんです」

そこで、学生時代から興味を持っていた国際関係について改めて学ぼう、と一念発起した泉川先生は、「英語を話せるようになれば今後もなんとかなるだろう」とアメリカに留学。時代は1990年代後半だった。当初はヨーロッパの国際関係を研究の中心に据えるつもりでいたそうだが、その時期、北朝鮮の核開発や、台湾総統選挙に対する中国の軍事恫喝(台湾海峡ミサイル危機)など、東アジアの国際関係が揺れ動く。先

生は東アジアの動きに興味を抱き、研究を深めていった。

では、東アジアの国際関係にはどのような特徴があるのだろうか。泉川先生に解説していただいた。

「それは、ハブ・スポーク型システムである、ということ。自転車の車輪に例えて説明すると、中心が『ハブ』でこれに相当するのがアメリカです。そして、中心から伸びている多くの線が『スポーク』で、それぞれの先には日本を始め韓国や台湾など東アジア諸国が位置します。つまり、東アジアの国際関係はアメリカを中心とした複数の2国間同盟

で成り立っているわけです。冷戦時代には旧ソ連を中心に中国や北朝鮮、ベトナムなどで構成されるシステムがあり、アメリカ中心のシステムに対抗していましたが、冷戦終了後、それはなくなりました」

今後、中国が大きく台頭してくることが予想される。アメリカと中国は2大国として対立するのか、共存するのか、それとも中国が東アジアの覇者となるのか。またそれにより、東アジアの国際関係はどう変化していくのか。このテーマへの興味は尽きない、と泉川先生は語る。

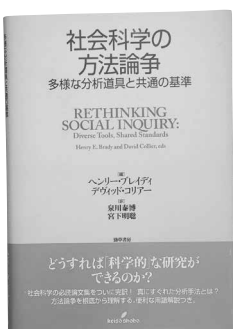
「同盟関係の分断」。
さまざまな事例の中に
潜むパターンを見出す。

しかし、泉川先生の研究は、単に国際情勢を見つめるものではない。「僕の本当の専門は『国際関係理論』。理論屋なのです」

それはどういったことを追究するものなのか、泉川先生に訊ねた。「日本で『国際関係』というと歴史や地域面での分析が中心となるので、『理論』と言われてもピンと来ないかもしれません。歴史分析では、例えば1972年の日中国交正常化といったエポックを取り上げ、当時を知る人に取材したり資料を集めて読んだりして、この出来事に関してどんなことが起こっていたのか、詳細に明らかにしていきます。一方、理論分析では、出来事の中の特定の要因が結果にどのように作用したのかを追及します。それを複数の出来事についても適用できるか検討し、それぞれの中に息づいているパターンを抽出していく。そして、今後の



泉川先生が論文を寄せている雑誌や報告書。



泉川先生の翻訳共著。「理論」について理解したい人は必読。

外交や国際政治で活用できる『理論』として磨き上げる。それが僕の研究内容です」

国際関係の中でも、泉川先生が研



泉川 泰博 (いずみかわ やすひろ)

京都大学法学部卒業。ジョンズホプキンス大学高等国際問題大学院国際関係学研究科修士課程修了。ジョージタウン大学政治学研究科政治学博士課程修了。一般企業に就職した後、National Security Archives 研究助手、投資責任研究センター日米政治経済担当研究員、ジョージタウン大学政治学部非常勤講師、宮崎国際大学比較文化学部助教授、神戸女学院大学文学部英文学科准教授を経て2009年中央大学総合政策学部准教授。専門は国際関係理論(安全保障理論)、アメリカ外交、東アジアの国際関係。



泉川先生のゼミの様子。活発な雰囲気、学生も意見や質問をどんどん発言。



この日は、学生の研究に対し泉川先生が感想を述べながら、より効果的に研究を進めるためのポイントなどを解説。

テーマに関心を持ったのか、理由を掘り下げてみて』と伝えます。選んだテーマには自分の興味をかき立てる何かがある、第六感を信じてまずそこを明らかにしてみよう、とアドバイスする。原点に立ち返ることで、学生が改めてテーマに向き合うきっかけをつくれればということです」

また、学生がテーマの発見や分析を論理的に行えるよう、「研究のデザイン方法」を指導してマスターさせているそうだ。「研究のテーマを見つけてそれに対する疑問を明確にし、疑問を解決する説を複数立てたうえで、その中から自分の仮説を選ぶ。それから、その仮説が真実かどうか、事例を集め考察するなどの手法で検証していく、実証へ結び付ける。この一連の流れが『研究デザイン』です」言われてみれば、ごく当たり前の

ことと感じるかもしれない。しかし、日本の教育システムでは依然として与えられた情報を理解して応用できることが重視されており、自ら課題を設定して解決策を見出していく力を持つ学生はそれほど多くない、と泉川先生は感じているようだ。「この『研究デザイン』は研究時だけではなく、どの企業でどの業務に就いている時でも役に立つもの。なぜなら『扱っている品が売れないのはなぜか?』や『業務をスピーディに進めるにはどうしたら良いか?』といったビジネス上の課題にぶつかった際に、自分で考え解決策を導き出すための方法になるからです。研究を通じて学生にこの方法を体得し、思考力を伸ばしてもらいたいと考えています」

高校生の皆さんへ

現代は情報過多の時代で、何に関しても驚くほど多くの情報を入手することが出来ます。そのため、どの情報の質が高く信頼に値するかを

判断する能力が、その人のパフォーマンスを大きく左右します。そして判断をするためには、自分の中に「基準」がなければなりません。国際関係を始めた分野であっても、そこで起こる出来事にはパターンがあります。そのことを認識していれば、一つ一つの事柄に振り回されず、パターンに当てはめることで物事の全体像をより早くとらえられるようになります。パターンの習得により、情報を整理するための基準を自分の中に持つことができるのです。国際関係というテーマは、以前であれば特定の専門家が把握していれば良いものでした。しかしグローバル化が進んだ現在、企業規模を問わず海外派遣が行われる事例が増えており、国際関係についての基礎的な知識を持つことは社会人にとって常識となりつつあります。高度な知識を持つ専門家になる必要はありませんが、自分なりの判断基準に基づいて考えることができる力を大学で身に付けてほしいと思います。



北朝鮮問題に対し、北東アジア諸国の協力のあり方を考える講演会に参加。モデレーター（進行役）を務めた。

ンを見出せるのか。この切り口での先行研究が進んでいなかったもので、それならば自分が追究しようと思ったのです」

東アジアでも同盟関係の分断を狙った事例は数多く見られる、と泉川先生は例を挙げて説明してくれた。「例えば1950年代に日本とソ連の間で国交正常化交渉の場が持たれたことがあります。これはソ連の視点で見た場

合、日本とアメリカの同盟関係の分断を目指す戦略の一つだったと考えられます。また、1990年に『北方外交』のもと韓国がソ連との国交樹立を実現させていますが、韓国の意図を推察すると、これにはソ連及び中国と北朝鮮との同盟関係にくさびを打つ狙いがあったのではないかと見ることが出来ます」先生はこうした事例を考察し、同盟関係の分断

にはどんなパターンがあるのかを研究しているのだ。

それにしても先生のお話を伺っていると、国際関係の「真実」を見極める難しさを感じる。それをわかりやすく表す最近の事例として、泉川先生はこんな話もしてくれた。

「2010年11月にメドベージェフ大統領が国後島を訪問するなど、北方領土問題について、近年ロシアが日本に対し強硬な姿勢を示しています。日本政府の対応が弱腰なのでロシアが増長するのだと政権を批判する声もありますが、僕から見ると、その意見は半分は正解だけれどこの事態のある側面しか見ていない。現在、ロシアとアメリカの関係が良好なんですよ。アメリカのオバマ大統領にロシアとの関係性を強化したいという意向がある。だからロシアは、北方領土問題で日本を刺激しても、アメリカが介入してくる可能性が低いと踏んでいるんです。このように、国際関係は表に出ている一面だけ見てもあまり意味がない。その根底にどんな意図や動きがあるのか、とい

うことに注意を払う視点が必要なのです。事象の表相にのみ目を奪われると、正確な洞察はできません」

興味の原点を見つめ、研究の方法を伝授して学生の思考力を伸ばす。

泉川先生のゼミでは「国際関係理論」と「外交政策論」を扱う。ゼミ生の志向は多彩で、公務員や研究者を志望する者はもちろん、一般企業への就職を考える学生も参加しているそうだ。やる気さえあれば、どんな進路希望の学生も歓迎する、と泉川先生は言う。

指導に際し泉川先生が心がけているのは、「学生の考える力を伸ばす」こと。そのために、ゼミの中で泉川先生はさまざまな「援護射撃」を行うよう試みるという。「例えば学生が研究をする際、せっかくテーマを設定しても資料が集まらなかったりして挫折するケースが見受けられます。そんな時は、『自分はなぜその